

耳にかじりついても勝つ

輪島功一

インタビュー
重田玲

東京・西荻窪にある輪島功一スポーツジムにて。

「お好きな言葉を教えてください」

「〴〵根性と勇気〴〵。大切なのはこの二つだね」

現在、ジムを経営している輪島功一氏は、プロボクシング元世界J・ミドル級のチャンピオンである。二五歳という遅いデビュー、J・ミドル級にしては恵まれない小柄な身体を克服。一度負けた相手から世界タイトルを奪回するという偉業を二度も成し遂げ、「炎のチャンピオン」と呼ばれた。逆境にも負けない強い心と丈夫な身体は、どのようにしてでき上がったのか。その秘密を伺おうと思った。しかし、話は恋愛から国防論にまで及び……。



目次

第一章	子どもだったから、苦労だなんて思わなかった	7
第二章	船酔いに苦しめられ、東京へ	23
第三章	焦らずに急げ。伸びるのは真面目な人間だ	41
第四章	知っていてもできなければ知らないのと同じ	59
第五章	俺、女に頼っちゃう。だから怖い	73
第六章	頑張れば、金は後からついてくる	87
第七章	「炎の男」は長嶋さんにあやかっ	103
第八章	リターンマッチは必ず勝つ	119
第九章	勝負、勝負、勝負。人生は勝負の連続だ	137
第十章	はつきりものを言える自信	153



ジムの壁には輪島氏手書きの文字で「心体技」「練習は根性、試合は勇気」と書かれた貼り紙がある。選手たちは何気なく目をしているうちに、その文字が身体に染み込んでくる。

第一章

子どもだったから、苦労だなんて思わなかった

開墾用の馬に乗って学校へ行った小学生時代。

素足で登校したら女の先生が毛糸の靴下を編んでくれた。

「ジムの練習生と同じように、輪島会長と呼ばせてください。会長、今日は本音に迫りたいと思います(笑)」

「本音、いいねえ。今、本音というか本当のことを言うやついないだろう。はつきりものを言う嫌われるから。だけど俺は言う。何度も同じことを言っちゃうよ(笑)」

「会長の現役時代を知っている人と知らない若い人とは、イメージがだいぶ異なると思います。日本人では珍しい重い階級で世界王座につき、同じ相手と戦ってタイトルを奪回するという偉業を成し遂げました。しかもそれぞれの試合は壮絶なものがありました。ことに昭和五年の柳^{ユ・ジエドク}斗選手との二戦目、勝ち目は無いといわれていた試合で、見事KOで王座に返り咲きました」

「うん、俺の持ち味がすべて出せた試合だね」

「年配の知り合いがその試合をリアルタイムで見ている、思わず涙が溢れてきたと言っていました。お葬式でも泣かないような、スポーツでほとんど感動なんかしたことがないような人なんですけれど、とにかくあの試合はすごかったって。でも今の若い人でそういったこと

を知らない人たちは、会長のことをテレビでときどき見る変なオジさんくらいにしか思っていないかもしれません。それは実にもったいないことだと思っんです。試合を通じて、あるいは人生を通じて築かれてきたさまざまなこと、困難を乗り越えるテクニクだとか、試合に勝つ方法だとかを、じっくりお伺いしたいと思います」

「おう、いいねえ」

「ジムの壁に、手書きの文字で心、体、技ってありますね」

「心、技、体の間違いじゃないぞ。心があつて身体があれば、技は後からついてくるという意味だから」

「練習は根性、試合は勇気という言葉も掲げられていますね」

「誰も見ていなくても練習する。しかも同じことを何度も繰り返してできるか。サボろうと思えばサボれる。単調な練習にこそ根性が必要なんだよ。しかし試合では勇気がないと力が出せない。よくいるんだよ、ジムでのスパリングはものすごくうまいのに、試合のリングの上では足が竦んじゃって動けないやつが。試合は怖い。相手に自分のパンチが当たるとこ

ろまで近づくには、勇気がないとね」

「怖いですね。私も剣道と空手をやっていたから、なんとなくわかります」

「おう、そうかい」

「ところで前からずっと疑問に思っていたんです。なぜ輪島ボクシングジムじゃなくて輪島功一スポーツジムという名称なのか、と」

「今でこそ何々スポーツという看板を掲げているボクシングジムはよくあるけど、ジムを開いた二七年前は珍しかったんだ。ボクシングというと限定されちゃうけど、スポーツというといろんな意味が入るでしょ。だからスポーツジムにしたの。そうしたら、どこもかしこもスポーツジムって名前をつけるようになった(笑)。だけど最初につけるのは勇気が必要だったんだよ。ボクシングジムだとわからなくて、誰も来てくれなかったらどうしようかと思ったけど、老いも若きも、男も女も来いって思いを込めたんだ」

「老若男女に来てほしいっていうことですけど、ジムの設立は、会長に続く世界チャンピオンを養成するのが目的じゃないってことですか」

「そりゃ、チャンピオンになれるやつが出てくれば嬉しいよ。だけどそれが目的じゃないから。結果よりも過程が大事。それにボクシングというスポーツを多くの人に広めたかったからさ」

「ボクシングといえば、一般的にいつてハングリイなイメージだと思っんです。どん底から這い上がってチャンピオンになる、みたいなの。会長ご自身だつて、言葉は悪いですけど、それこそ血みどろになつて戦つて栄光を掴んできたと思っんです」

「だからさ、俺がチャンピオンになつたのは結果であつて、そもそもはスポーツをしたくてボクシングを始めたんだから」

「えっ、そうなんですか」

「当時勤めていた白岩工業という建設会社に西島さんという部長さんがいてね。その人から『スポーツをする人間に悪いやつはいないよ』つて言われて。俺も悪い人間じゃないし(笑)、何か始めようと思つてさ。第一、金がなくて食べることに精一杯だったときはスポーツどころじゃなかつたからね。建設作業の仕事で金ができて、ようやくスポーツができたんだ」

「それじゃ、ボクシングで世界チャンピオンになってお金を稼ぎたいなんて……」

「全然思わなかった。第一、始めたのが遅かったから」

「二五歳でしたよね」

「二五っていえば、ファイティング原田(*)さんが引退した年だよ。二五でデビューなんて誰も相手にしてくれないよ」

「なぜボクシングを？」

「毎日、宿舎から現場までみんなと一緒にマイクロバスで通う間に、ボクシングジムがあったんだ。サンパクジム、ん？って思っ、仕事終わって出かけて行って、『なんでですかサンパクって』と聞いたら、ジムにいた若いやつが、『バカヤロー、ミサコ(*)って読むんだ』って」

「ハハハ、三迫(*)ジム」

「『もう二五になるんですけれど、ボクシングやらせてくれるんですか』って聞いたら、『金さえ払えばいいんだバカヤロー』って。二〇歳くらいのやつに言われて、コノヤローって思ったけど。入会金が四〇〇〇〇円くらいだったかな。一万円札出したら急に眼の色変えて、『旦那、

すみません、お釣らないんです」って。俺、バカヤローから旦那になっちゃった(笑)。それで、『釣りは明日でもいいですよ』って言ったたら、『どうもすみません』って。金は人の見方を変えよるよね」

「当時、三迫ジムには東京オリンピックで金メダルを取ってプロに転向した桜井孝雄(*3)さんがいらっしやいましたけれど、入る前からご存じでしたか」

「いや、まったく知らなかった」

「そうなんですネ！ やはり最初はスポーツをしたい、という思いだけで、ボクシングには詳しくなかったのですネ。ところで、小さいころからスポーツはされていましたか？」

「野球をやっていたくらい」

「ご出身は北海道の士別だと伺いました」

「いや、生まれは樺太なんだ。親父は山師で木材の売買をやっていて裕福だったらしい」

*1 ファイティング原田…本名、原田政彦。日本人で初めてフライ級、バンタム級の二階級を制覇した。

*2 三迫ジム…三迫仁志氏により開設されたボクシングジム。輪島功一、三原正、友利正ら世界チャンピオンを輩出。

*3 桜井孝雄…中央大学出身のアマチュアボクサー。東京オリンピックのバンタム級で金メダルを獲得しプロに転向したが、ついに世界の王座につくことはできなかった。